

# こんな映画を観ました！感動！怒り！勇気！

## 被ばく牛と生きる

～殺さなきゃダメですか～

この映画の存在は知っていましたが、意外にも、たまたま手にした別府ブルーバードの上映チラシに載っていたのを目にしました。九州で初の上映とはいえ、このような映画を商業上映する勇気と見識に驚いたものです。



映画は、フクシマ原発事故後の放射能汚染地域の牛たちを殺処分しようとする国と、何としても守っていこうとする畜産農家のたたかいの様子をドキュメンタリーで描いていく物語です。映像では、次々に殺され大きな穴の中に埋められていく牛たちが映されます。その側では処分する行政側と思われる人と、涙を流しながら見守る畜産農家の人たち。

被ばく牛を生かす道は「大型動物の低線量被爆研究」に資することですが、国は一刻も早く証拠を消したいかのように、この研究から手を引きます。

ある農家の男性は、被ばく牛をトラックに乗せ、東京で見てもらおうとしますが、制止しようとする当局ともめます。男性は「こうでもしなきゃ、国は解らない」と吐き出します。男性の姉は、福島で牛たちと暮らしながら「気持ちは解るが、あんなことしなくても、ここで牛と生きていくことが何よりも意思表示になると思いますよ」と静かに語ります。

## 知事抹殺

～収賄額ゼロの事件を仕立てて～

ひとりの知事（福島県知事でフクシマ原発事故の真相を明らかにしようとしただけに）が、何故か政治生命を絶たれます。

それも、とても不可解な過程で収賄容疑をでっち上げられ、結果的に収賄額ゼロという結末で。一体国家権力は、何を隠したかったのでしょうか。

さまざまな資料をもとに、本人の証言を交えて、つぶさに検証していきます。環境エネルギー政策研究所長の飯田哲也氏は「3.11のあの日、佐藤知事がいたなら、事故の対応は全く違っていただろう」。ジャーナリスト田原総一郎氏は「これはまぎれもなく検察による凶悪犯罪である」。同じく手島龍一



氏は「一体どこの国に収賄額ゼロの贈収賄事件などあるのでしょうか。ニッポン国の深き闇を抉り出しています」。

## 小さき声のカノン

～ひびき合う「子どもを守る」母たちの声～

「カノン」とは「輪唱」のこと。小さな弱いお母さんたちの声が、次々に波紋を広げて伝わっていきます。

『六ヶ所村ラブソディー』『ミツバチの羽音と地球の回転』の鎌仲ひとみ監督の最新作。宣伝文には「はじめはみんな、泣き虫なフツのお母さんだった。福島、そしてチェルノブイリ後のベラルーシ。お母さんたちは“希望”を選択した。」と書いてある。

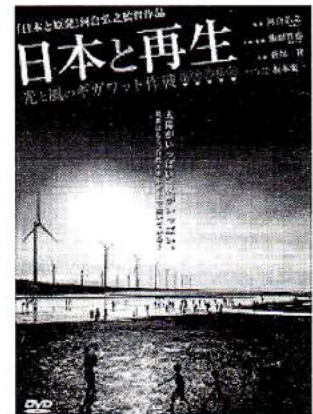
フクシマ事故から4年後の作品。事故による子どもたちへの影響はどうか。さまざまな議論の中ですくい取られない声が、不安を抱えたお母さんたちの声だ。



## 日本と再生

～自然エネルギーの可能性を実証する～

20年にわたって原発の危険を訴え、全国で原発差し止め訴訟を繰り広げてきた弁護士・河合弘之氏は、福島第一原発事故以降は、より一層、その活動に力を注いだ。国民に原発問題を理解してもらうために、自ら映画監督となり、原発問題映画「日本と原発」「日本と原発4年後」まで制作した。



原発差し止め訴訟でも裁判所で上映して、いくつか勝訴も勝ち取った。そして、河合さんは、再び思い立った。「原発を無くしたあと、自然エネルギーで十分にやっつけられることが分かる映画を作ろう！」。河合さんは、20年来自然エネルギーならこの人と信頼してきた飯田哲也氏を仲間に招き、第3作「日本と再生」を作り上げた。

この映画は、今この瞬間に起きている世界のダイナミックな変化を描いている。自然エネルギーが実用化していることはもちろん、これほどまでに急速に普及し、大きな変化を起こしている現実を目の当たりにした河合さんは、自然エネルギーの可能性を確信している。

(まとめ・脇元)